

(続紙 1 )

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	喜多野 裕子
論文題目	Dramatic Functions of Ballad Performances in Shakespeare's Tragedies (Shakespeare 悲劇におけるバラッド・パフォーマンスの劇的機能)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、歌、演奏、バラッド売りのパフォーマンス、印刷物等を通して広く社会に浸透していたバラッドが、Shakespeare 作品において劇中歌として使用される際の機能を Bruce Smith のバラッド・パフォーマンス論を援用し明らかにしたものである。扱う作品は、David Lindleyが特にバラッドの劇的機能の重要性を認めている三つの悲劇、すなわち <i>Hamlet</i>、<i>Othello</i>、<i>King Lear</i> 第一四つ折本である。</p> <p>Introduction は本論文の展開上必要な枠組みを提示する。まず バラッドを “a song that tells a story” (物語を語る歌)、あるいは “association with narratives” (語りとの関連) を特徴とする歌、と定義し、初期近代英国におけるバラッドの社会的機能の多様性を踏まえる。その上で、Shakespeare 演劇におけるバラッド使用の態様を、(1) 台詞中でのバラッドタイトルへの言及、(2) バラッド媒体に影響を受けた台詞、(3) 劇内容と類似するバラッド、及び (4) 劇中歌としてのバラッド使用、の4項に整理する。バラッドが過去からの口承文芸であり、路上や居酒屋といった共同体空間で演じられるものであることから、劇中におけるその効果として、pastness (過去性) と passion (情念) が喚起されることが確認される。</p> <p>Chapter 1 “Let her come in”: Ophelia's ballad performances and the protest of the populace in <i>Hamlet</i> は、<i>Hamlet</i> 第4幕第5場における狂気の Ophelia によるバラッド歌唱の劇的機能を明らかにしている。</p> <p>当時は貴族が請われもせず公の場で演奏するのは不適切であるとされていたため、Shakespeare 作品において歌唱するのは職業的道化や道化的人物、あるいは妖精、魔女、狂女等周縁化された者たちが殆どである。貴族でありながらバラッドを歌う Ophelia は社会階層を侵犯し、周縁化された民衆と同化する。その歌唱には、王に直接抗議することを許されない舞台裏の民衆の声が内在化していると考えられる。また、Ophelia の狂気による歌唱は、父の死を巡って兄 Laertes の復讐心を掻き立て、結果としてデンマーク王家の崩壊を導くという意味で、主筋と密接に関連している。章末ではさらに、同時代の他の劇作品における狂女の歌唱場面との比較を行い、劇構造内における Ophelia のバラッド歌唱機能の重要性を検証している。</p> <p>Chapter 2 “May the winds blow till they have wakened death”: Dramatic functions of ballad performances in <i>Othello</i> では、<i>Othello</i> 第2幕第3場における Iago および、第4幕第3場における Desdemona によるバラッド歌唱が扱われる。</p> <p>前者で歌われるのは出世の野心に燃える夫を妻がたしなめるバラッドである。本章</p>			

は、ムーア人軍人 Othello とヴェニスの大貴族の娘 Desdemona との結婚という人種の境界侵犯に対する非難を Iago がこのバラッドに込めていることを明らかにする。また、婚礼の夜に歌われるこの歌が中世以来の伝統であるシャリヴァリ（地域住民が結婚を認めず、夜中に集団で騒ぐ慣習）に類似する機能を有することも指摘している。

後者では“Willow Song”（「柳の歌」）が歌われる。本章はまず初期近代英国に広く深く多様に浸透していたこの歌の社会的背景を確認する。その上で、Desdemona の歌う“Willow Song”と類似のヴァージョンとの比較によって、Desdemona の歌唱は女性性が強調された領域で、死者も含めた女性の嘆きを歌に内在させ、Othello に不満を呈していると指摘する。さらに、Desdemona のバラッドが、本作の重要なモチーフである、死と密接に繋がるwind（風）を呼び込む儀式的側面を有することを見出す。

Chapter 3 Singing in Q1 *King Lear* では、*King Lear* 第一四つ折本 第1幕第4場および第3幕第2場における道化のバラッド歌唱、第3幕第6場における Edgar と道化によるバラッド歌唱、および第4幕第4場、第5幕第3場における想像上の歌唱が扱われる。

宮廷内での道化の歌唱は、王 Lear の過ちや衰えた判断力を批判するという本来の機能を持つ。しかし、第一の嵐の場面でのバラッド歌唱は、主従関係を越えて Lear と道化の心的、身体的距離を縮め、共有感覚を生み出す。本章はさらに、これが四つ折本のみに見られる現象であることを指摘している。

Edgar は社会最下層イメージの複合体としての道化 Tom に扮して Lear 一行に加わり、階級を越えて道化とともにダイアログ・バラッドを歌う。本論文は、Edgar のように結末において未来の為政者になる可能性が示唆される人物が歌唱すること、しかも階級侵犯し歌を道化と共有することは、Shakespeare 作品において稀有な例であり、実験的であることを論証している。

章の最後では、舞台上の歌唱のみならず想像上の歌声も重要な劇的装置として機能していることが指摘される。*King Lear* の結末近くで、大声で歌う Lear の様子が報告の形で語られ、観客は想像の中でのみ Lear の歌声を聴くことになる。さらに敗軍の Lear は、娘 Cordelia と共に牢獄で“pray, and sing, and tell old tales”（「祈り、歌い、古い物語を話し」）ながら暮らすことを望むが、その直後に Cordelia が殺害されるため、舞台上に二人の歌が響くことは永久に阻まれる。Lear の長い苦悩の旅を観てきた観客は想像の中で父娘の歌声を聴き、そのことが本作の悲劇性を高める、と本章は締めくくられる。

Conclusion では、各章で扱った悲劇において、バラッド歌唱が主筋や作品の根幹となる要素と密接に関連していることを振り返る。さらに21世紀版 *Othello* ともいえる Toni Morrison 作 *Desdemona* (2012) の検討を通して、バラッドは社会の諸相を反映しながらリサイクルされ存続することを確認し、文学研究とバラッド研究の相互触発の可能性を展望して結びとしている。

(論文審査の結果の要旨)

英国ルネサンス期の劇作家 Shakespeare による舞台上での音楽の使用については、既に長い研究の歴史がある。ここでいう音楽とは、登場人物による歌唱や楽器演奏を始めとし、コーラス、ファンファーレ、そして BGM までをも含んでいる。本論文はこのような多様な音楽形態の中で、物語との関連の深いバラッドの演劇的機能を Shakespeare の悲劇 (*Hamlet*、*Othello*、*King Lear* 第一四つ折本) のテキストに密着しつつ考察し、その結果、バラッドが劇の飾りや余興ではなく、作品の流れを左右する本質的な要素であることを明らかにしたものである。

バラッドは、英国の中世以来広く社会に浸透していた音楽ジャンルである。

Shakespeare の時代には大きく分けて、口承で伝わる民衆バラッド (伝承バラッド) と、印刷物で伝わるストリートバラッド (ブロードサイドバラッド) があつた。後者は印刷術の確立されたルネサンス以降の時事を伝播する媒体であつたが、バラッド売りがそれを歌いつつ販売したため、書物のように純粹に文字だけによって伝達されたものとはいいがたく、前者と共通する口承性も持ち合わせている。このような存在形態のゆえに、バラッドは文学の中では低い位置に貶められてきた。近年、初期近代英国における媒体としてのバラッドの重要性や同時代の商業演劇との関連性についての再評価が始まっているが、劇的装置としてのバラッド使用についての研究は充分なされておらず、従来の Shakespeare 研究においても重要な課題とされてきたとはいいがたい。本論文はバラッド演奏を研究の中心にすえることによって、Shakespeare 研究の空隙を埋めようとする試みといえる。本論文の意義は次の三点にまとめることができる。

まず、本論文が Chapter 1、Chapter 3 において、バラッド歌唱がもたらす境界侵犯性を解明したことである。*Hamlet* および *King Lear* 第一四つ折本においてバラッドを歌うのは、それぞれ狂乱の Ophelia と乞食に変装した Edgar である。この二人が貴族階級に属しながら、下位の階級文化であるバラッドを歌うことにより、前者は民衆の声と、後者は道化の声と同化し、両作品の展開を支えていることを本論文は指摘する。また、この現象がいわゆる模擬裁判場面が削除された *King Lear* 二つ折り本には確認できず、当該場面を有する第一四つ折本のみの特徴である、ということも指摘し、バラッドの意義を十分に見出すためには版本間の異同への留意が不可欠であることを説得力をもって論じている。

第二の意義は、本論文が Chapter 2 の *Othello* 論において、バラッド歌唱の持つ儀式性を指摘したことである。バラッドは上に述べたように民衆の間に自然発生的に生まれたものとされるが、本論文は、Shakespeare がそれを劇中に用いながら、シャリヴァリと死の招来を舞台上で生起せしめ、バラッドが単なる挿入歌ではなく、この悲劇作品の儀式性を強めてプロット展開に貢献している、という卓抜な知見を示している。

第三の意義として、本論文がバラッド研究と演劇研究を結びつける機能を持っている

る、という点が挙げられる。Shakespeare という英文学上の巨大な存在に関して、先行研究の膨大な蓄積を前に研究者は何ができるのか、が常に問われる。本論文は、考察の対象を、作品中ではバラッド歌唱に絞ると同時に作品の外ではバラッドという文化現象へと視野を広げることによって、Shakespeare 作品を英国の中世からルネサンスの文化的文脈の中に位置づけて見せた。一方、従来のバラッド研究の多くは民衆バラッドとストリートバラッド、または18世紀以降に詩人が創作した文学バラッドを対象としており、演劇において用いられる態様にまで研究が及ぶことが少なかった。本論文は Shakespeare 研究を通して、バラッド研究と演劇研究を結びつける新たな、しかし着実な研究方法を提示するものとなっている。

もともと、本論文には不満な点がないわけではない。著者自身も認めているように、本論文は Shakespeareの悲劇におけるバラッドの意義を解明したものの、喜劇、史劇、ロマンス劇を含む Shakespeare の演劇全体でのバラッドの意義には手をつけ得ていない。また、Shakespeare と同時代において盛んにバラッドを使用した他の劇作家たちについても同様である。しかし、それらはむしろ、今後の研究の可能性を示唆するものと考えることができよう。本論文で示された手法によって、Shakespeare および他の演劇作品が、民衆文化を吸収・変容させる様態が明らかにされることが確信される。

よって本論文は分野横断的な研究として、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年6月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成 年 月 日以降